

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：33303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K17453

研究課題名(和文) 糖尿病透析患者の「家族と結びつく能力」を育成する患者教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of patient education program to nurture the "ability to connect with family members" in dialysis patients with diabetes

研究代表者

岡山 未来 (OKAYAMA, Miki)

金沢医科大学・看護学部・講師

研究者番号：50515335

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：目的1) 糖尿病透析3年を過ぎた方を参加者に、現象学的アプローチを用いて面接を行い、糖尿病透析患者と家族も含めた周囲の人々との関係性の変化を明らかにした。糖尿病透析患者と身近な人々との関係性を図式化した。

目的2) 3) コロナ禍の影響で、介入研究の実施が困難であった。そのため、研究方法を一部変更し、「家族を含めた周囲と結びつく能力」を量的に捉え、評価するための尺度開発を計画し、実施した。尺度原案の作成は、「社会力」(門脇, 1999)という「子どもの社会化のための意欲や能力」の枠組みと、目的1)の結果、および先行研究(木本・稲垣, 2012)の結果を踏まえた。信頼性と妥当性を確認し測定尺度を開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果として「家族を含めた周囲の人々と結びつく能力」測定尺度を開発できたことによって、糖尿病透析患者の「家族を含めた周囲と結びつく能力」の因子構造とその特性が明らかになったことが学術的意義である。因子構造とその特性を活用し、教育プログラムの考案できるからである。糖尿病透析患者の「家族も含めた周囲の人々と結びつく」ための教育プログラムにおける患者の目標(概略案)を5つ設定した【未発表】。今後は、本教育プログラムにおける患者目標(概略案)から、行動目標の設定と、その行動目標に沿った教育プログラム内容の具体化を行う。実践およびその実践効果を検証することで糖尿病透析患者のQOLの向上に寄与できる。

研究成果の概要(英文)：Purpose1) We interviewed participants who had been on dialysis for 3 years using phenomenological approach, and clarified the changes in the relationship between diabetes dialysis patients and their surroundings, including their families. The relationship between diabetic dialysis patients and people close to them is illustrated.

Purpose 2) and 3) It was difficult to conduct an intervention study due to the influence of the corona disaster. Therefore, we partially changed the research method and planned and implemented a scale development to quantitatively capture and evaluate "the ability to connect with surroundings including family members." The draft scale was created based on the framework of "social power" (Kadowaki, 1999), which is "willingness and ability for socialization of children", the results of Objective 1), and previous research (Kimoto and Inagaki, 2012). Based on the results. Reliability and validity were confirmed and a measurement scale was developed.

研究分野：糖尿病 透析 患者教育

キーワード：糖尿病 透析 患者教育 社会力

1. 研究開始当初の背景

末期腎不全 (ESKD) の有病率は、国際的に増加している。ESKD の治療には、血液透析、腹膜透析、腎移植がある。日本では、血液透析治療の選択率が 90% 以上であり、細やかな透析管理がなされ、世界で最も良好な治療成績 (導入時期・維持期に関わらず) をあげている。

日本の血液透析患者全体の中で、最も一般的な原疾患は糖尿病腎症である。近年の透析医療の発展に伴って、糖尿病透析患者にとっても、透析長期化が進んでいる。糖尿病透析患者が QOL (生活の質) を保ちながら透析安定期を目指すことが求められるが、患者の QOL は低い。そのための患者教育のプログラム開発は急務である。

患者の QOL が低い要因に、ソーシャルサポートの不足が挙げられる。その背景に、患者にとって周囲の人々に頼ることへの切り替えに困難が伴うことが挙げられる。これまで糖尿病の療養生活に主体性を求められ続けてきたことや、透析治療に伴う症状による身体機能の低下、そして、糖尿病治療と透析治療の両方を管理が必要となることにより、周囲の人の手を借りて療養生活を送ることが必要にも関わらず、周囲の人々に頼ることへの切り替えには困難が伴う。そのため、患者の QOL を向上させるための患者教育を効果的にするためには、「サポート源となる家族や医療者といった周囲の人々と結びつく能力」が必要である。

よって、糖尿病透析患者が、QOL を保ちつつ透析安定期を目指すには、患者が抱く周囲の人々の中での孤立感への対処能力を身に付け、糖尿病透析患者が「家族や医療者といった周囲の人々と結びつく能力」を育成するための教育プログラムの開発は非常に重要である。

糖尿病透析患者の人間関係について複数の報告を概観すると、サポート提供者となる家族や医療者など身近な人とのトラブル報告など、これらの報告はいずれも、糖尿病透析患者が、身近な集団の中で孤立感や疎外感を抱きやすく、透析導入をきっかけに、身近な集団と離れてしまう存在として理解されている。しかし、研究者は、先行研究 (木本・稲垣, 2012) で、2 型糖尿病透析患者の体験を記述した。結果、患者は、家族の中で孤独を抱えながら、それでも「家族を思いやる姿」を描くことができることを明らかにした。又、3 年以上の維持透析をしている患者は (岡山・稲垣・多崎, 2013) 「周囲の人々への恩返しを胸に、社会の一員として精一杯生きる姿」とともに、「心身ともに決して安らかではないが、役割を果たす自分を抛り所にして奮起する姿」を描くことができることを確認した。

これらの研究結果は、糖尿病透析患者の中に、大きく状況が変化した環境においての人間関係であっても、身近な人と結びつく力が内在することを示唆している。

ただし、彼らの中に内在する力がどのような力であるのか不明である。つまり、どのような人間関係を築く力があるのか、そして、彼らが、そのような人間関係をどのような具体的な行為によって築くのかについては明らかではない。

従って、以下の段階を経て、糖尿病透析患者の「周囲の人々と結びつく能力」を育成するための患者教育プログラムを完成させていく。

- (1) 糖尿病透析患者の「家族も含めた周囲の人々と結びつく能力」について、現象学的アプローチを用いて、彼らの中に内在する力について明らかにする。
- (2) 「家族も含めた周囲の人々と結びつく能力」を用いた糖尿病透析患者の教育プログラムを開発する。
- (3) 開発した教育プログラムの有効性を検証する。

2. 研究の目的

(1) 糖尿病透析患者の「家族も含めた周囲の人々と結びつく能力」について、透析治療を 3 年過ぎた糖尿病患者の質的なデータから、糖尿病透析患者と周囲の人々との関係性の変化を捉え、彼らの中に内在する結び付きについて記述し図式化する。

(2) 先行研究および(1)の結果から、「家族も含めた周囲の人々と結びつく能力」を用いた糖尿病透析患者の教育プログラムを開発する。

(3) (2)の結果から、開発した患者教育プログラムを患者に適応し、QOL や自尊感情、周囲との結びつきが改善されるか有効性を評価する。

3. 研究の方法

(1) 糖尿病透析患者と周囲の人々との関係性の変化を捉え、患者の「家族も含めた周囲の人々と結びつく能力」について、段階別 (中間期、安定期) に焦点を当て、現象学的アプローチを用い

て記述する。

(2)先行研究で記述した糖尿病透析患者の家族に思いを抱くという体験と、(1)で明らかにする質的データを踏まえ、「家族も含めた周囲と結びつく能力」についてどのような人間関係を築く力があるのか、どのような具体的な行為によって築くことができるのか明らかにし、糖尿病透析患者の「家族と結びつく能力」を育成するための教育プログラムを開発する。

(3)開発したプログラムを患者に適応し、QOLや自尊感情、家族も含めた周囲との結びつきが改善されるかその有効性を評価する。

4. 研究成果

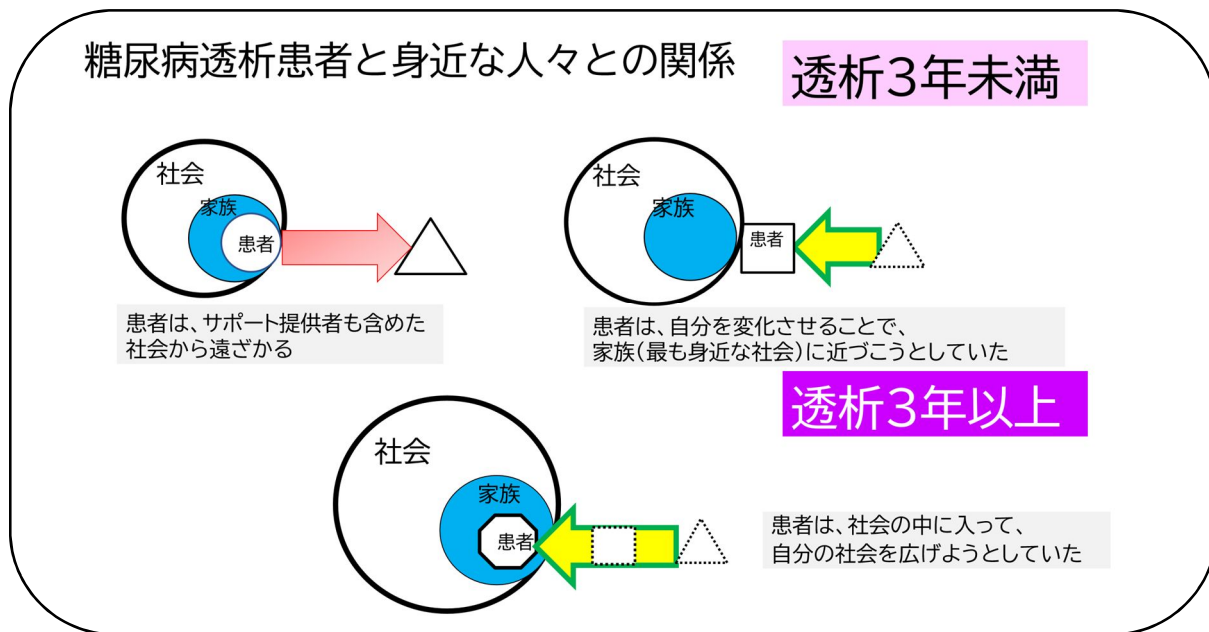
(1)糖尿病透析患者が周囲の人々と結びつく現象に関して、中間期～安定期の方を参加者に追加調査を行い、現象学的アプローチを用いて明らかにした【透析導入3年すぎた糖尿透析患者の周囲の人々への思い 岡山未来, 稲垣美智子 看護実践学会誌, 33(2): 20-30, 2021】。

結果として以下の患者の姿が浮かび上がった。

透析を受けている自分の状態、または出来事を支えてくれた人々に、自分が生き延びてもらったことを感謝し、今の自分に出来る限りの恩返しをしたい。

自立した生活を保ちながらも、いざというときに頼ることの出来る人がいることに安堵する。年々衰える身体を自覚しながら、周囲の中で役割を果たす自分を拠り所にして今日を生きる。自分が成し遂げたいことのために、今、どうしてもこの身体が必要である。

本研究結果、および先行研究(木本・稲垣, 2012)の結果を踏まえ、糖尿病透析患者と身近な人々との関係性の変化について整理し、図式化した。



(2)および(3)

当初、(1)の結果を踏まえ、「家族も含めた周囲と結びつく能力」の詳細について明らかにし、その内容を基に、教育プログラムを考案する、考案した教育プログラムを患者に対して介入研究を行う予定であったが、コロナ禍の影響で、介入研究の実施が困難であった。

そのため、研究方法を一部変更し、「家族を含めた周囲と結びつく能力」を量的に捉え、評価するための尺度開発を計画し、実施した。

糖尿病透析患者が、身近な人々との関係からより多くの人との関係に広げようとしていたことから、「子どもの社会化」と類似していることに着目した。社会化のための人間の意欲や能力である「社会力」(門脇, 1999)に着眼し、「家族も含めた周囲と結びつく能力」について概念定義を行った。尺度原案の作成は、「社会力」という「人と人が結びつき社会を作る力」の枠組みを活用し、研究目的(1)の成果、および先行研究(木本・稲垣, 2012)の質的結果を踏まえた。作成した尺度原案の信頼性と妥当性を確認し、測定尺度を開発した。

【「A novel scale for measuring social competence in patients with type 2 diabetes

receiving hemodialysis」Miki Okayama, Michiko Inagaki, Keiko Tasaki
ウエルネスヘルスケア学会誌, 44 (2), 11-21, 2021 .】

開発した測定尺度の5つの構成概念は、下記の通りである。

First factor : Balancing autonomy with dependence on their family
Second factor : Trust and affinity towards people close to them
Third factor: Trust in people
Fourth factor: Interest towards understanding diabetes
Fifth factor: Trust in their body

さらに、糖尿病透析患者の社会力尺度の5つの構成概念と下位尺度32項目より、糖尿病透析患者教育の専門家と共に因子構造とその特徴について検討した。

その内容を基に、糖尿病透析患者の「家族も含めた周囲の人々と結びつく」教育プログラムにおける患者の目標（概略案）を5つ設定した【未発表】。

家族に対して助けてもらう範囲と自立して実行する範囲とを患者が判断し、家族に伝えるスキルを身に付けること。
周囲の人との交流（同施設内の透析患者）を通して、他者を信頼する感覚を取り戻すこと。
透析導入以前の糖尿病時代を振り返ることを通して、自分の糖尿病に対する意識を向けること。
自分の成し遂げたいことを焦点化し、今の身体を必要な身体として意味づけること。
療養行動に必要な知識や管理方法を明確にし、再学修すること。

今後は、本教育プログラムにおける患者目標（概略案）から、行動目標の設定と、その行動目標に沿った教育プログラム内容の具体化を行う。また、プログラム対象となる患者の条件（透析歴や性別）を選定し、実践およびその実践効果を検証する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岡山未来, 稲垣美智子	4. 巻 33
2. 論文標題 透析導入後 3 年経過した 2 型糖尿病患者の 周囲の人々に対する思い	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 看護実践学会	6. 最初と最後の頁 20-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Okayama Miki , Inagaki Michiko , Tasaki Keiko	4. 巻 44
2. 論文標題 A novel scale for measuring social competence in patients with type 2 diabetes receiving hemodialysis	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of wellness and health care	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24517/00060406	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	稲垣 美智子 (INAGAKI Michiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------